

生涯現役 – A J Southward 賛

大垣俊一

ここ数年、イギリスの海洋生物長期変動の論文が、続々と発表されている。このシリーズの研究は、プリマス研究所を中心に 1920 年代から行われ、1950 年代以降、生態学関連の代表的な雑誌や Nature 誌に成果が公表されるようになった。その後ここ数十年、どちらかといえばマイナーな雑誌に散発的に見られるのみで、やや目立たなくなっていたのだが、最近になってますます増加するデータを背景に、再び表舞台に出てきた感がある。それら一連の業績に、かつてと同じく AJ Southward の名があるのを見て、相変わらず active だなあ、と感心しながら読んでいた。ところがあるとき、2008 年の論文の著者名をよく見ると、肩に故人を示す十字の印が付いている。ああそうだったのか、としばし寂寥感にとらわれた。

私が Southward の名を知ったのは大学生のころ、海の生物の研究を志し、その著「海岸の生物 (原名 Life on the Sea-shore, 時岡・西村訳, 河出書房新社)」を読んだときである。その後、田辺湾生物相の変動を主なテーマとしてからは、Southward を中心として進められるプリマスの業績を読み進めた。当時は 1980–90 年代で、海岸生態学は Connell, Paine のあと Underwood らによる、厳密な実験計画法と統計処理による種間関係の研究が全盛のころである。それとの比較ということに目が行かざるを得なかったが、同時にそういうレベルを越える正統性が、このシリーズの研究にはあるように思われた。つまり「粗い」がしかし「的はずしていない」。

その後、黒潮と南日本の海岸生物相の関連で、メキシコ湾流とイギリスの海の生物の関係に興味を持ち、文献を探したが、あまり出てこない。その時、こういう問題は Southward に聞くのが一番良いと思ったので、全く面識はなかったが、手紙を出してみることにした。ちょうど番所崎の 10 年分のデータが論文にまとまっていたので、別刷りを同封し、「この論文は、去るヨーロッパの雑誌に投稿して不首尾だったものだが、こういうスタイルは特にオーストラリアあたりでは受け入れられないようです」と添え書きして、それへの応答も楽しみにしていた。これに対し、Southward は即座に反応し、長いメールの返事をくれた。そこには、「黒潮流域の長期変動研究は、私が長く待ち望んでいたものである」と、私の論文を評価した上、メキシコ湾流とイギリスの海洋生物相との関連についての見解、およびこのテーマに関する大量の文献のリストが添付されていた。私の論文の経緯については、「大変残念なことだ。どの雑誌かは見当がつくし、オーストラリアうんぬんが誰のことであるかも、私は知っている。"A very bad referee who thinks statistics are more important than biology."」と、痛烈な批判が書いてあった。私はこれを見て驚くと共に、この人は自分と同じ感覚を持っている、と感じた。メールには「MBA の新所長の Hawkins に話して、海洋生物変動の国際シンポをやらないか。ただしオーストラリア人は抜きで。」と、ジョークを交えて提案してあったが、私は出不精なので、ナマ返事をする

うち、この話は立ち消えになった。しかしその後も、田辺湾の論文を読んでもらったりするなどやり取りは続き、メールに「近々スピッツベルゲンに行く」などとあるのを見て、もう相当高令のはずだが元気だなあ、と感心したものである。

Crisp, Southward, Lewis, Kitching ら、イギリス海洋生態学の草創期を担った人々は、良きナチュラルヒストリーの伝統を体現し、方法は素朴ながら本質を突いた問題意識で数々の重要な事実を明らかにした。私はこの時代に、現在の海岸生態学にまで至る主要なテーマはほぼ出揃ったと考えている。特に Southward は、大規模な笠貝除去実験で海岸における種間関係の重要性を鮮やかな形で示して、その後の種間関係論の端緒を開く一方、プリマスグループの中心となって、現在まで続く長期研究を主導した。これは水質からプランクトン、底生魚、海岸生物までも含む総合的なプロジェクトで、数多くの研究者が関与してきたが、経過には紆余曲折があった。とくに 1980-90 年代には予算がつかなくなり、ほとんどの調査が中断する憂き目を見ている。金のかからない潮間帯のみが、Southward を含む個人の努力によって続けられた。このとき Southward は、これまでの成果を総括しながら行政当局による資金の打ち切りを批判する論文を書いている。この背景として、プリマスの長期研究を総括した 2005 年のモノグラフには、'short-term process studies' が主流になる中で、モニタリングは 'poor science' であるという風潮があったと述べられている。しかし近年、温暖化の問題が注目されるようになって調査は復活し、冒頭述べたごとくの論文ラッシュが始まった。

ところでプリマスの研究は、田辺湾の長期研究とも深いところで結びついている。田辺湾の研究を創始した時岡隆さんは、プリマスの研究を先行事例として意識していた。初期の島島調査の手法である半定量法はイギリスで始められたのであり、また私も、それら一連の研究を横目に見ながら調査を進めてきた。

若いころ立派な業績を上げた研究者も、高令になると時代に取り残され、やがて自分の殻に閉じこもるようになるということは、残念ながらしばしばあることのようにだ。しかし Southward は最後まで活動的であり、幅広い興味を持ち続けた。生態のみならず、フジツボや有鬚動物の分類、生物地理にも造詣が深く、その方面の業績もある。一貫した方針の下に多くの人々との共同研究を推し進め、健全な批判精神を失わなかった。その Southward も、'short-term process studies' が主流になる中でメジャーな雑誌に自らの論文が掲載されなくなったときには、さすがに時代に取り残されたように感じたのではなかったろうか。しかし最後にみごとに巻き返した。本筋の研究は、必ず復活するのである。

一度お会いしてみたかったが、それも今ではかなわぬこととなった。逝去を知って間もない冬のある日、コタツで文献を読みながらついうとうとしていると、こんな光景が浮かんできた。

灰色のレンガ造りのビルに、私が入ってゆく。Plymouth Laboratory の建物らしい。入り口に近い窓口で、Southward さんはおられますか、と聞くと、あいにく不在だという。ではこの別刷りを渡してもらえまいかと、名刺をクリップで挟んで渡し、私は引き返すことにした。入り口の階段のところ、一人の老人とすれ違った。あるいは… と思いながらちらりと見ると、向こうもこちらの視線を感じたのか見返して、

一瞬眼が合った。そのまま外に出て、海岸沿いの堤防の方へ歩いて行こうとすると、うしろから私の名を呼び止める声がある。振り返ると先ほどの小柄な老人が、別刷りを手にニコニコしながら立っていた。

"Dr. Southward… Very nice to meet you !"